

「地面部隊行ってきます！」

上下のつなぎ服に身を包み、収穫かごを脇に抱え、その女性たちは枝で覆われた茂みの中に分け入って行った。「川上さん、後を追ってください!」私はカメラマンの川上氏にその女性たちを追うよう指示した。「えっ、ホントに行くんですか?」川上氏は二の足を踏みながらもその女性たちの後を追い、茂みに分け入って行った。『匍匐前進』。読者諸氏はこの四字熟語が読めるだろうか。『ほふくぜんしん』と読む。腹這いになって、手と足を使って地面をするように移動する事、と辞書には書いてある。よく軍隊訓練の映像などで見る事もあるだろう。しかし、実際に匍匐前進を目にした経験をどれほど人が持っているだろうか。今、私の目の前で繰り広げられている光景は、まさにその匍匐前進だった。女性たちは匍匐前進で目的の位置まで到達すると、今度はくるりと反転し仰向けになった。仰向けになった目線の先には、ちょうど手の届く位置に大きなアップルキウイが実っている。女性たちは慣れた手つきでアップルキウイを収穫した。そして次のアップルキウイを収穫すべく、匍匐前進を繰り返した。

さて、私は文字だけでの場面をイメージしてもらえるよう努力して執筆しているつもりだ。しかし、今回に限っては、この場面をイメージしてもらえてるかどうか全くもって自信がない。仮にこの場面をイメージできている読者がいたら、それは感謝感激雨あらである。そもそもキウイはどんな状態で実っているのかというと、ぶどう畑や梨

畑をイメージしてもらえばわかりやすい。枝の高さを一定にした『棚』というものを作り、その棚の高さで実をつけている。多くの場合、収穫作業は立って行い、棚の高さも人間の背の高さに合わせているのだ。その作業工程の中で匍匐前進をする場面は、一般的にはまず無い。

「そろそろ戻ってきてー」という男性の声にも、「大きいの見つけた。もう少し奥まで行ってみるー」と、一向に従う気配の無い女性たち。数十分後、泥だらけになったつなぎ服に身を包んだ女性たちが茂みの奥から戻ってきた。その収穫かごは大きく実ったアップルキウイで溢れんばかりだった。「うん、美味しい!」。収穫したばかりのアップルキウイをガブリと頬張るその女性たちの笑顔からは、匍匐前進で収穫してきた大変さは微塵も感じられなかった。むしろ充実感が溢れていた。

## “キウイ山とキウイ名人”

福岡県八女市立花町兼松辺りの山深い場所に、キウイ山と呼んでいるその場所はある。正確な所在地が不明なのは、それだけ山深い証拠で、加えて、山の一部は携帯の電波が届かない。八女市は北九州市に次ぐ、福岡県では2番目に広い面積を有する自治体だが、その66%は森林である。前回特集した梅干の平島農園も八女市であるが、平島農園が矢部川沿いの開けた平地にあった事を考えると、今回のキウイ山の山深さは八女市の広さを物語つ

ている。また、福岡県はキウイの生産地として全国2番目の生産量をほこり、その中でも八女市のキウイ生産量が自治体別での全国一である事はあまり知られていない。主にヘイワード、レインボーレッドという品種が多く栽培されている。我々はキウイといえば夏の果物という印象を持っているが、それは国内で流通しているキウイのほとんどがニュージーランド産だからである。実はキウイの旬は冬場である。日本とは季節が真逆のニュージーランド。ニュージーランドの冬は日本の夏。まさにこれからの季節が国産キウイの旬なのだ。

そんなキウイの里に一人の名人がいた。残念ながら、ここでは『キウイ名人』とだけしか紹介できない。そのキウイ名人は、みかん畑だったこの山をキウイ山に変えた。しかも有機無農薬。誰もがヘイワードやレインボーレッドを生産する中アップルキウイを生産した。その理由を尋ねると『農協に出たくないから』と事もなげに言った。アップルキウイの生産者はほとんどいない。生産量の少ないものを農協は買い取らない。だから自分で作って自分で売るという選択をした。急峻な斜面に二町歩(約2ha)のキウイ棚を整備。美味しいアップルキウイを育てた。そのキウイ名人も年を重ね、急峻な斜面を利用したキウイ山の管理は高齢のキウイ名人には負担になった。脚を悪くした事もあり、キウイ山の管理を断念せざるを得なかった。

それから数年の時が流れた。枝が伸び放題となったキウイ棚はその重さに耐えかね、徐々に地面を覆うようになった。その様相はもはやキウイ棚の面影はなく、広大な枝の茂みであった。ところが、そのような状況下でも毎年アップルキウイは立派に実をつけた。キウイ名人は言う。「丁寧に土作りをしたからですよ」。そして、「こんな状況下でも実をついているアップルキウイは生命力が強いから更に美味しいですね」。キウイ山の周辺には山以外何も無い。その環境も良かったとキウイ名人は言う。「周囲から農薬や化学肥料、生活排水が流れ込んだりしなかった。自然の状態のままだったのが良かったと思います。有機JAS認証という言葉がありますが、私はその制度ができるずっと前から有機無農薬でやってきた。私の方が先なんです」。そのキウイ山に手を差し伸べる助っ人が現れたのは今から2年前の事だった。

## “想いの出発点”

鹿野(かの)徹一さん(43歳)。地元八女市で養蜂業、並びに蜂蜜加工業を営む株式会社正栄の代表である。昭和48年創業企業の2代目として24歳の若さで社長に就任した。経営経験はゼロ。社会人経験さえも十分に積んでいない鹿野さんはその重責に苦しんだ。売上は激減。しかし、その実を真正面から受け入れた鹿野さんは経営

に本気に取り組んだ。経営の勉強をし、事業の立て直しに一心不乱に取り組んだ。この時、外部から蜂蜜を仕入れていたものを自社生産に切り替える、つまり養蜂を行なう決断をした。「養蜂と農業って密接につながっているんですよ」。これをきっかけに農業への関心が高まった。

必死の事業立て直しによってようやく業績も回復。同時に蜂蜜における生産、加工、品質管理、販売という一連の流れを確立した。この強みを活かし農業においても足掛かりを探していた鹿野さん。もともと『八女市オーガニックタウン構想』というものを行政に提案した事があった。ところがその時はけんもはろろに却下されたと言う。鹿野さんは思った。「成功事例を作らなきゃダメだ」。そんな時に、知人を通じてキウイ名人と出会った。キウイ名人はこの時の事をよく覚えていた。「想いをもった若い方だなという印象でした」。農業は予期しない事がよく起る。そんな時でも人と違ったやり方で農業をやろうと思うなら、想いが大切だ。と言うのがキウイ名人の矜持である。想いだけでは事を成せないが、想いがなければ事は成せない。「この人にならキウイ山をお願いしても良いと思いました」。

鹿野さんの動きは早かった。すぐに法人化手続きをとり2019年に農業生産法人を立ち上げた。初年度はこのキウイ山に加え、熊本県和水町にハウスを立て、トマトやピーマンの有機無農薬栽培を始めた。この時、鹿野さんに誘われジョインしたのが、前田逸平さん(28歳)と砂川(すな

がわ)洋子さん(39歳)だった。前田さんは輸入車販売会社から、砂川さんは食品関連会社からの転職であった。鹿野さんは初年度をこう振り返る。「加工と販売に関しては、本業のノウハウが活かせるので何とかなると思っていたのですが、甘かったです。物ができませんでした」。和水町で有機無農薬栽培に着手したトマトやピーマンは、ほとんど収穫に至らなかったと言う。「ただ、早めに失敗して良かったと思います」。鹿野さんはこの経験を教訓に集中戦略をとる事を決めた。つまり、キウイだけに絞って事業を進める事を意思決定した。そして、2020年12月15日、農業生産法人 株式会社八女フルーツを設立した。



# 導かれ交差した想い達が高めた視座